様式８
「川づくり団体」部門

河川基金助成事業

「生き物好き集まれ・子供スタッフ育成プログラム」

助成番号：2022-6113-010

うのき水辺の楽校協議会
代表者氏 名　牛島　貞満

2022 年度

１.子供スタッフ育成プログラムの目的と内容

１．１目的

⑴「子供スタッフ育成プログラム」は、多摩川の自然や生き物に興味もち、人間と自然とのよりよい働きかけをしようとする子供たちの育成を目的とし、多摩川の環境リーダーとして成長することを応援する。

⑵将来子供たちが大人になった時に、この地域をはじめ地球の自然環境を大切にする人材の育成を図る。

１．２内容

⑴うのき水辺の楽校が主催する研修会に参加し、自然観察の方法を講師の指導で学ぶ。多摩川で生き物を採集した生き物の見分け方を『多摩川生き物図鑑』(うのき水辺の楽校編)等を使いながら身に着けていく。さらに野鳥観察等をしながら、川の生き物のつながりなどを、体験を通して学ぶ。

⑵ガサガサ・川の生き物調べや野鳥観察などの自然観察会で、子供スタッフとして参加し、多摩川や生き物のことを参加者に伝える。

⑶多摩川について学んだことをまとめて、子供スタッフ研修発表会などで発表する。

⑷様々な機会にを通して川での安全な遊び方や調べたことを広める。

以上の課程の決められた条件を達成した子供スタッフには「認定書(修了書)」を授与した。

写真 1.1 子供スタッフ実習②「ガサガサ体験・生き物調べ」9/23(金)図鑑を使って採集した生き物を調べる

１．３取り組むようになった理由

⑴以前から、うのき水辺の楽校の活動に積極的に参加し、大人のスタッフに交じって、準備・片付けなどを手伝う子供たちがいた。その子供たちは、川に入る回数も多く、生き物採集も大人より上手で、他の参加者に教えたり、一緒に参加していた保護者らに生き物の説明をしたりしていた。こうした活動経験から、生き物の知識や自然のおもしろさは、大人より子供同士の方が良く伝えられると考えるようになった。

⑵2019 年度より、そのような小学生に役割を与え、「子供スタッフ」の名札をつけて、試行的に活動してもらうことにした。小学生の子供スタッフを卒業した中学生たちが、中学校が地域活動へのボランティア参加を奨励していることもあり、当会の活動に続けて参

写真 1.2 子供スタッフ研修②「ガサガサ体験・生き物調べ」6/18(土)片付けをする大人と子供スタッフ

加していた。また、対象を小学校 4 年生以上中学生までとしたのは、①保護者が付き添わなくても会場までの行き来ができること、②研修を継続して重ねることで多摩川の生物や自然への興味・関心を繋げ深められることを期待したからである。

写真 1.3 子供スタッフ研修③「ガサガサ体験・生き物調べ」7/３(日)調べた結果を発表する子供スタッフ

⑶「子供スタッフ」としての活動は、大人スタッフの手伝いでなく、役割と仕事を明確にする必要があった。当初の役割は、ガサガサでは、生き物の採り方の見本の実演、野鳥観察会では、一般参加者より 30 分早く集まり、講師とともに下見をしたり、双眼鏡の使い方の説明をしたりすることであった。さらに他の子供たちに「教える」には、それなりの学習の場が保障されなければならなかった。そこから、子供スタッフ研修会が始まった。⑷翌 2020、2021 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大で大勢の人数を集めての自然観察会の開催は困難になった。そこで、コロナ禍にあっても少人数の子供たちを対象に継続的に実施できる活動として、「子供スタッフ育成プログラム」を重点的に取り組むことになった。また、研修内容としてどのようなことができるかを模索した。

２．２０２２年度の実施状況

２．１子供スタッフ育成プログラムの発足とその後の推移

⑴本格実施の 2020 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大で、当会の活動も 7 月からになり、子供スタッフ登録者も 13 人であった。研修会も十分に実施できなかった。翌 2021 年度は登録者数を 2 倍に増やそうと、「子供スタッフ募集」チラシを大田区内の多摩川沿岸に位置する小学校 23 校 4 年生以上と近隣の中学校 3 校および区内の図書館や出張所などの公共施設に配布した。予想をはるかに超えて 53 人の申し込みがあった。実際に活動に参加したのはそのうち、8 割ぐらいであるが、事務局としても登録者数の多さに驚くとともに、川や自然への関心や体験的な活動への興味が高い親子が多いことを感じた。このような活動が地域のニーズとしてあることが見えてきた。子供スタッフ育成プログラムは、コロナ禍でいかに少人数の子どもたちと「うのき水辺の楽校」の活動を継続するかを模索した結果、苦肉の策として生まれたともいえるのである。(図 2.1 参照)

⑵発足から 4 年目の 2022 年度は、「子供スタッフ募集」チラシの配布の小学校を 15 校に絞ったにも関わらず、82 名が登録した。前年度と同様に大勢の子供たちを集めるガサガサや野鳥観察は、新型コロナウイルスの感染の可能性があるので取りやめ、生き物好きの少人数の子供たちに継続的に体験と学びを目的にして試行錯誤を重ねた。コロナ禍での行動制限に準拠しながら、活動を続けたことで、登録人数、研修の回数も増え、内容面での充実も図ることができてきた。しかし、登録者数増加は、現在の事務局の体制では、運営が難しくなっている。

図 2.1　　うのき水辺の楽校　子供スタッフ発足からこれまで

年度	登録人数	認定数	研修（屋外実施）		Web研修リモート		自然観察会一般参加（小学生）		子供スタッフ延べ参加人数(発表会を含む)	延べ総参加人数(発表会を含む)
			回数	延べ参加人数	回数	参加人数	回数	参加人数		
2019	7	7	試行につき観察会前に実施				7	321		666
2020	13	5	4(7月から)	26			3(9月から)	150	31	186
2021	53	13	6	105	4	88	0(中止)	0	214	376
2022	82	18	13	312			4	68	333	742

２．２　２０２２年度の研修会の実施状況（９回実施＋Web 発表１回）

⑴４年目となる「子供スタッフ育成プログラム」には８２名が登録し、実習や Web 発表会を含めると延べ 333 人が参加した。研修８回(ガサガサ３回、干潟１回、野鳥２回、カヤック体験１回、発表会１回)、自然観察会実習４回(ガサガサ２回、丸子の渡し祭り１回、野鳥観察１回)、発表会に向けた相談会１回の計 13 回（実施日 17 日）を行った。１回の参加者は平均約 20 人だった。研修会と実習に７回以上参加し、本年２月に Web 発表した１８名に認定書、３名に研究発表奨励賞を発行した。

⑵発足式とガサガサ、その後２回の研修会では、川に入ってガサガサで生き物を採ることの楽しさと、生き物の見分け方のおもしろさを体験することを目的とした。

「エビや魚がいっぱい取れてうれしかった。魚の採集が上手くなりたい。」「面白かった事は、川で魚が採れたことです。一生懸命探して見つけた時の達成感がすごかったです！私は特に、ヌマチチブという魚が気に入りました」(第１回研修会５月 28 日)との感想から、ガサガサ初心者で生き物が採れたことを喜んでいた。

⑵研修②③(※別紙資料２０２２年度うのき水辺の楽校活動予定参照)をのガサガサの方法と生き物の見分け方は、『多摩川生き物図鑑』等を使って、自分や仲間が当日採集した生き物の種類の見分け方や、生き物の生態などをくわしく知る講座を行った。回をかさねると「前回はエビを１匹捕まえただけだったけど、今日はニホンウナギとエビを数匹捕まえられたのでうれしかったです。クロベンケイガニみたいなデカいカニが６匹くらいいて、捕まえようとしたら、もぐらたたきみたいに直ぐすきまに引っ込んで全然とれなかった。だけど、いろいろ捕まえようとすることは楽しかったです！」(第３回研修会７月３日)と感想の中に生き物の種類の名前が出てくるようになる。初めは、生き物をたくさん採りたい、との考えから徐々に生き物の種類や採り方に興味が移っていった。

写真 2.2 子供スタッフ研修②「ガサガサ体験・生き物調べ」6/18(土)ガサガサをする子供スタッフ

⑶研修⑥⑦の野鳥観察の方法では、講師の日本野鳥の会・萩原洋平さんより、どのような視点を与えると野鳥観察の興味が広がるか、周りの昆虫や植物と季節等とのかかわりで、野鳥を見る楽しさを教えていただいた。
「僕は、初めて野鳥の観察をしたけれど、野鳥にはいろいろな種類が居て、初めて知る鳥も沢山ありました。今度は、教えてもらった事を生かして、初めて参加する人に教えたいです。」(第 10 回研修会 1 月 14 日)
⑷その他の研修、研修④カヤック体験は「水鳥の目線で、川面から多摩川を眺めてみよう」と、親子２５組が参加して家族毎に 2 人用カヤックを体験、岸辺のガマの穂を採集した。
また 2 年ぶりに実施された丸子の渡しで、うのき水辺の楽校として、「ミニ水族館」の生き物展示を行った。実習として、来場した子供たちに多摩川の生き物を説明した。12 名の子供スタッフが参加し、特にカニやウナギに触れるコーナーは大好評だった。

２.３自然観察会での実習

⑴子供スタッフが自然観察会に参加する子供たちに伝える場を設けることにした。子供スタッフ育成プログラムを受講して身に着けた知識や伝える方法を試す場である。この自然観察会(ガサガサ、野鳥観察)で、お客として参加する子供たちに生き物の採集の仕方や特徴、種類の見分け方等について、自らの経験や言葉で伝える。
⑵人数を制限するため、分散して実施するなど工夫して、多摩川でのガサガサ体験・生き物調べを 2 日、野鳥観察を２日実施して、一般参加の小学生 68 名に対して子供スタッフ 88 名が観察の手伝いや野鳥観察のおもしろさを伝える実習を行った。

写真 2.3 子供スタッフ実習「ガサガサ体験・生き物調べ」９/23(金)一般参加の子供たちのグループに、生き物の採り方を伝える子供スタッフ

⑶１回目の自然観察会(ガサガサ・生き物調べ７月 30 日)では、クループを決めたものの、いざ川の中に入ってしまうと生き物採りに夢中になり、バラバラになり、「採り方を教える」ことは、うまくいかない子供スタッフもいた。２回目はの９月２３日は、慣れと「前半のガサガサは一般参加の子供たちに採り方を教える」としたこともあり、一般参加の子供たちが子供スタッ フについて動き、生き物を一緒に採る場面が多く見られた。ほとんどのグループで採り方の伝授が行われていた。
「ウナギが採れてびっくり、ウナギを触って楽しい、もっと捕まえたい」「生き物の飼い方まで詳しくやってくれて分かりやすい」「子供スタッフが言っていた『水草をほる』をしてみたらヌマチチブやエビがいっぱいとれました」9 月 23 日第 2 回自然観察会・ガサガサ【一般参加】)

「ぼくは、初めての人たちにスジエビとテナガエビの見分け方を教えてあげました。初めての人たちが『これは、スジエビだ』と言っていたのでぼくが『それはテナガエビだよ』と教えてあげました。スジエビは体に逆のハの字でテナガエビはM、マックのマークだよと教えてあげました。みんな生き物がとれてよかったと言っていました。」9 月 23 日【子供スタッフ】）

⑷野鳥観察は、初心者は森の中で鳥を見つけることはなかなか難しい。双眼鏡を覗いていても、お目当ての野鳥を見ているかどうかも分からない。自分が見つけることができなかった経験を活かして、ていねいに教えている姿が見られた。双眼鏡の使いかた、野鳥の見つけ方を伝えることができた。

「鳥の鳴き声が聞こえたりすると、その鳥についてとても詳しく教えてくれてとてもありがたかったです。」「あの鳥は、なに鳥　あの鳥は、なに鳥 」と言っていて鳥の種類がわかりやすかった。」（1 月 15 日第 3 回自然観察会・冬の野鳥観察【一般参加】）

写真 2.4 子供スタッフ実習③「冬野野鳥観察」1/15(日)一般参加の子供たち野鳥のいる場所を教える子供スタッフ

「僕は初めて子供スタッフをしたので、教えるのが難しかったけど、諦めないで教えられました。双眼鏡の、使い方について説明して、わかって貰えたのがうれしかったです。」「同じグループの一般の子は双眼鏡の使い方をすでに知っていたので、その他にエナガやシジュウカラの声が聞こえた時に教えてあげた。」（1 月 15 日・冬の野鳥観察【子供スタッフ】）

２．４子供スタッフＺｏｏｍ発表会　（2023 年 2 月 19 日、2 月 25 日）

うのき水辺の楽校では、子供スタッフによる 1 年間の活動のまとめとして発表の場は大切だと考えて、２月に Zoom での発表会を開催した。発表の希望者が多く、2 日間の開催になった。２１名の子供スタッフが発表し、子供スタッフ、講師、保護者や大人スタッフ延べ 50 人が、それぞれの自宅から参加した。これまで体験したこと、調べてきたことをまとめた活動報告や「私の多摩川研究」で報告することで、子供本人だけでなく、水辺の楽校としての蓄積になっていくことが期待出来る。

発表内容は以下の通り。

⑴2022 年度活動報告（2/19、2/25）

①ガサガサ報告　４件　小学校 4 年 4 人

②野鳥観察報告　２件　小学校 5 年 2 人

⑵私の多摩川研究（2/19）

①「ゴクラクハゼについて」小学校 4 年

②「僕がつかまえた水辺の生き物」小学校 5 年

③「水槽の水質について」小学校 5 年

④「ニホンウナギについて」小学校 4 年

⑤「多摩川の水鳥～食べ物とくちばしの関係」小学校４年
⑥「水鳥はなぜ群になっているか」　小学校５年
⑦「多摩川で見た鳥の群れ」　小学校５年
⑧「スイス・ジュネーブからの野鳥報告３」(予告編)スイス中学校３年
⑨「多摩川の正体不明の魚」　小学校６年
講評：萩原洋平さん（日本野鳥の会）
⑶私の多摩川研究（2/２５）
⑩「多摩川でとった川の上を走る虫（アメンボ)」小学校４年
⑪「多摩川でとったハグロトンボ」　小学校４年
⑫「多摩川台公園で見つけた灰色の大きなかっこいい鳥（アオサギ)」小学校４年
⑬「天気の違いでの水鳥の過ごし方」小学校５年
⑭「ウナギについて」　小学校４年
⑮「おととしかっていたミナミメダカ」小学校４年
⑯「多摩川の外来種について」小学校６年
講評：羽澄ゆり子さん(多摩市水辺の楽校)
活動報告では、
「森の鳥はよく鳴くので耳を使う、双眼鏡の使い方を説明するのが難しい、などから野鳥観察は色々難しいが使いこなせば、とても楽しい！」「雨の日は小鳥たちがあまり鳴かずに餌を探し回るなど晴れの日と行動が違って勉強になった。」
「ガサガサや野鳥観察で自然と触れ合えた、水辺の楽校で習ったことを学校の友達に教えてあげたい」との感想があった。
また、「飛び上がってバッタを食べた魚はなに？」や「四季の水温の変化で魚は形態を変えるのか？」などの次に繋がる課題をあげていた。
また発表会には、2020 年に嶺町小学校を卒業してスイスに移住した子供スタッフメンバーが参加し、日本とスイスの野鳥の違いや共通点など、鳥の翼に関する考察などを詳しく報告した。
特別報告「スイス・ジュネーブの野鳥」
※スイスとの時差が８時間あり、午後７時からの開催になった。
講評：萩原洋平さん(日本野鳥の会)
発表のスライドを末尾に掲載

3. 子供スタッフ育成プログラムの成果と課題

３．１成果

⑴今年度は、コロナ禍であることを踏まえ、研修会・実習等の人数を制限のため分散して実施、天候等による中止を避けるために予備日を設ける等工夫して、予定していた全 13 回を開催することができた。
⑵昨年度は開催できなかった実習の場である自然観察会を 3 回(実施日４日)を開催することができた。研修の成果を活かして、一般参加の子供たちに伝える姿を通して、スタッフの一員としての自覚・成長を確認できた。

３．２子供スタッフの研修会などの参加率と認定者数

⑴登録者 82 人の内、1 回以上活動に参加した子供度もスタッフは 75 人(91%)、7 回以上参加したのは 20 人(24%)であった。

⑵登録者数に占める認定者の比率は、2019 年度 100%、20 年度 38%、21 年度 24%、22 年度 21%と年々下がってきている。(図 2.1 参照)登録者数に比べて、「認定書」を取得した子供が少ないのは、発表することを認定の条件としているからである。発表をしたが、研修会などの参加が少ない子供スタッフのために、今年度から年度をまたいで認定できるように条件を緩和した。「うのき水辺の楽校活動報告」や「私の多摩川研究」の発表に取り組むことで、子供目線での自然への探究や交流は、自覚と自信につながっていく。今どきの小中学生は、習い事、スポーツ、「学習塾」などで忙しく「うのき水辺の楽校」を最優先にできない子供たちも多い。芸術、スポーツ、学習だけでなく、川などで遊びながら自然とのかかわりを深める「環境」「生物」分野も子供たちの人格形成にとって大切なので、参加者の要望を取り入れることにした。

⑶発表が苦手な子供にとって、発表会はかなりハードルは高い。参加を規模した子供は、誰でも発表できるようにサポートしている。

「活動報告」は活動の様子を撮影した写真を用意し、発表原稿をサポートしている。

「私の多摩川研究」は、テーマを決める段階から Zoom で相談をしながら、調べ方の方法、専門家の紹介などスライドづくりを含めて助言やサポートをしている。こうした個別の相談活動を通して、テーマを絞り調べ進めることで、徐々に関心も知識も深まっていった。また。保護者も一緒に親子で協力しながら、発表を作り上げていくケースもあった。

３．３課題と今後の取り組み

⑴ガサガサでも野鳥観察でも研修は、1 度行ったら身に着くというものではない。ガサガサで何度も生き物を採集し、観察用水そうにいる生き物と図鑑を見比べ、他の子供スタッフと相談しながら同定作業を進めていく。大人スタッフの助けを借りながら、見分け方を身に着けていく。

⑵川の生き物たちは、ハゼの仲間の様に色や形が似ていて、見分けが難しいものも多い。中には、図鑑に載っていない生き物も採集されることもある。

季節や流れの状態(少し前に洪水があり、上流から生き物が流されてくることも)よっても生き物の種類も変わる。

採集の楽しみから、調べる楽しみに進化していく子供たちも多い。

写真 3.1 子供スタッフ研修②6/18「ガサガサの方法と川の生き物の見分け方採集した生き物を図鑑で調べる

「たくさん採りたい」「いろんな種類を採りたい」「自分が探している種類を採りたい」「これまで採集したことのない種類を採りたい」‥動機はさまざまである。
遊びから、探究へ、更なる楽しみの追究へと子供たちは進化していく。子供たちの声を聴きながら、研修会の内容やあり方を充実させていきたい。

３．４他の水辺の楽校との交流

⑴現在、同じ下流域であるが、河口のだいし水辺の楽校に協力をいただいて、干潟の生き物調べを行っている。川の様子も生き物の種類や量の違い等驚きも多い。また同じ種類もいてその暮らしぶりを比較する等学びは多い。他の水辺の楽校に参加して、下流汽水域の多摩川だけでなく、多摩川全体の見識を広める活動を進めたり、中、上流の水辺の楽校との交流を進めたりすることも課題である。また、多摩川を楽しみ学ぶための研修会を地域の環境団体などと協力していきたいと考えている。

３．５運営について

⑴2020 年度までは、鵜の木 6 町会に加えて田園調布南町会の役員の方々に、町会掲示板へ自然観察会等のポスターの掲示をお願いしていた。コロナ禍で自然観察会も参加人数を制限して実施していたこともあり、ポスターは制作しなかった。鵜の木地区町会連合会からは、運営費を含む様々な面で支援をいただいている。

写真 3.1 子供スタッフ研修②6/18「ガサガサの方法と川の生き物の見分け方　採集した生き物を観察用水そうに入れ、観察する

⑵子供スタッフの所属校は区内小学校 13 校、中学校 7 校へ広がった。参加者が増え、活動内容が多様になることで運営面での負担も増えている。
当会は発足から 10 年目に入り、発足当初の運営スタッフ(事務局のメンバー)から、活動を知った地域の方、参加している小学生の保護者に広がっている。特に今年度は、事務局を置く嶺町小学校以外の学校の保護者が事務局メンバーに参加し、大変心強かった。今後世代交代も含めて、一緒に水辺の楽校の活動内容を考え、支え、作業する仲間を増やしていきたいと考えている。
さらに、子供スタッフの卒業生は、中学、高校生活の忙しさから、会の活動から一時遠のくこともあるが、大学生、社会人になり、うのき水辺の楽校の運営を担う地域の人材に育っていくことを期待している。

写真 3.3 子供スタッフ研修①5/28「発足式・ガサガサ

私の多摩川研究

多摩川でとった
川の上を走る虫（アメンボ）

田園調布小学校
4年
A

1

②動機

捕まえた虫の種類と食べ物が知りたかった。

何故水の上で立てるのかを知りたかった。

2

③仮説　食べるものについて

魚を食べるのではないか?もしかすると陸に上がって花の蜜を吸うのではないか？

なぜ水の上で立てるのか

足に油が塗られているからではないか？

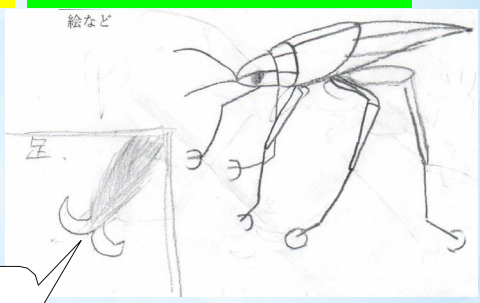
3

④調べ方

1　図鑑で調べる
2　牛島先生に聞く
3　インターネット

4

⑤結果　なぜ水の上で立てるのか



あしに
短くてかたい
毛がある

5

⑤結果　なぜ水の上で立てるのか

インターネット調べ

6

⑤結果　アメンボは何を食べるか

魚のエサ×
水草×
虫の体液○
魚の体液○

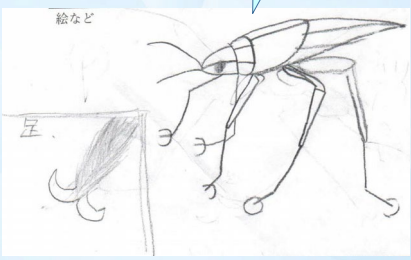
7

⑥考察　種類はアメンボ

アメンボが水面を自由に泳ぐ姿はかっこよかったです。だからアメンボを調べました。アメンボは足についている毛のおかげで水面を自由に動けるのです。僕はほかにもアメンボのような虫を見つけてみたいです。

8

終わりです。



9

① テーマ

おととしかっていた
ミナミメダカ

嶺町小学校
四年 M

1

①目次

① テーマ
おととしかっていた
ミナミメダカ
嶺町小学校
四年 丸山光咲

1.説明
(名前の由来・とくちょう・分類・産卵期・生息地)
2.食べ物
3.ヒメダカとミナミメダカのちがい(メイン)
4.問題!ヒメダカとミナミメダカ一緒にしていい?
(おまけ)

2

動機 ②おととし多摩川でとったミナミメダカ、今は死んでしまい、いなくなったけれど、もっとたくさんのことが知りたかった。

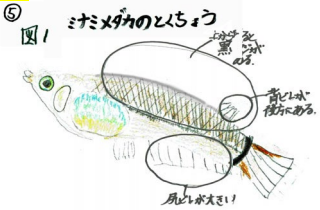
仮説 ③ミナミメダカとヒメダカは、同じメダカだけれど、ちがいはたくさんある。

調べ方 ④調べ方
・多摩川生き物図鑑
・インターネット

3

結果

⑤ 図1 ミナミメダカのとくちょう

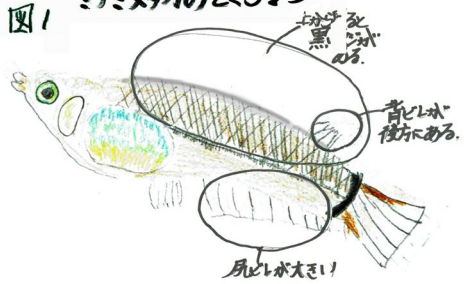


説明
名前の由来(南目高)
目が大きく、頭部の上の方についているので、「目高」。地いきによって北メダカと南メダカでわかれる。とくちょう:1.目と尻ビレが大きい。2.背ビレが後方にある。3.上から見ると黒いスジがある。
分類:メダカ科 産卵期:5月~9月 生息地:中流~下流
図1 ミナミメダカのとくちょう

4

結果

⑤ 図1 ミナミメダカのとくちょう



5

結果

⑥ 図2 食べ物

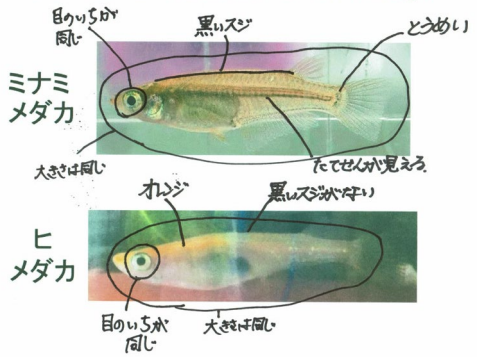
食べ物
かっているメダカと多摩川(自然)にいるメダカの食べ物でくらべた。
かっているメダカ:メダカようのごはんを食べる。
多摩川(自然)にいるメダカ:ちいさい落ち葉を食べる。図2
食べ方:水面にあがってすうように食べる。また多摩川でとったミナミメダカにもメダカのごはんをあげて食べていた。なので、多摩川(自然)のメダカの食べ物は落ち葉だけでは、ない。

6

結果

図３ ミナミメダカとヒメダカの違い

⑦



7

考察

⑧ 考察

ミナミメダカとヒメダカでは、ちがいもあるが同じところもある。なので、だいたい予想どおりだった。

8

おまけクイズ

問題(1)

ヒメダカとミナミメダカ一緒のすいそうに入れてもよい？

1.よい 2.すいそうがいっぱいないからよい 3.ダメ

9

おまけクイズ 答え

問題(1)

ヒメダカとミナミメダカ一緒のすいそうに入れてもよい？

1.よい 2.すいそうがいっぱいないからよい ③.ダメ

10

おまけクイズ

問題(2)

どうして一緒のすいそうに入れてはいけない？

1.ケンカをするから、 2.住む水エサがちがうから 3.りでんし的ようちょうを守るため。

11

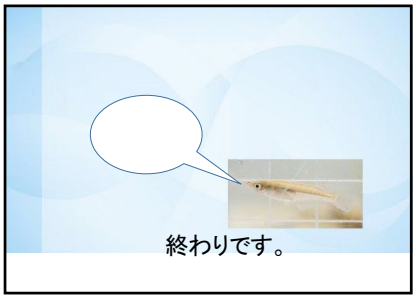
おまけクイズ 答え

問題(2)

どうして一緒のすいそうに入れてはいけない？

1.ケンカをするから、 2.住む水エサがちがうから ③.りでんし的ようちょうを守るため。

12



13

多摩川の正体不明の魚

嶺町小学校６年　Ｋ

1

- 1年前、水辺の学校でガサガサをした時に、全長2cmくらいの小さな稚魚が採れたので飼ってみることにした。
- 数年前に同じように採ってきた稚魚を飼ってみたら、その稚魚はオイカワになったので、またオイカワになるかもしれないと考えた。

2

- オイカワのオスは、はんしょく期になると、色が青とピンクになりとてもきれいだった。

- 残念ながら、成長した1匹は水槽から飛び出して死んでしまった。

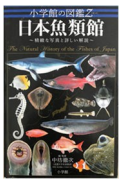
3

- 今回もこの稚魚はオイカワになるだろうと育ててみたが、このように育ってきた
  ➡ オイカワではない！

君はだれ？

4

図鑑で調べてみた
① 家にある図鑑



→ どれにものっていない

5

図鑑で調べてみた
② 図書館の本で調べた

日本の淡水魚図鑑(誠文堂新光社)

日本の淡水魚（大和渓谷社）

→ のっていた!!と思う (次のページへ)

6

図鑑のページ

成魚

若魚

(出典) 日本の淡水魚図鑑 (誠文堂新光社)

家の水槽の魚

多分、ヌマムツの
若魚だ!!

7

ヌマムツと考えた理由

- ✓ 口の下あごが大きい
- ✓ 背びれの形
- ✓ 全体的に黄色がかっている
- ✓ ウロコが細かい

うのき水辺の楽校の牛島先生にも質問したところ、
大阪府立環境農林水産総合研究所のサイトを教えて頂いた。

8

大阪府立環境農林水産総合研究所のサイトより
ヌマムツとカワムツ

家の水槽の魚

シリびれの形がどちらとも違う？
➡ヌマムツではないかもしれない
さらに水辺の楽校で追及してみようと思う

9

図鑑にはヌマムツについて以下のような記載もあった。

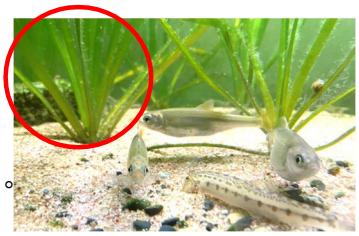
「琵琶湖周辺から静岡県、瀬戸内海沿岸河川から有明海沿岸河川に分布する。琵琶湖産アユの放流種苗に混入して各地へ移植されたと考えられている。」

多摩川にヌマムツがいるということは、アユの放流種苗に混ざっていたのだろう。人間が固有種の生息する地域を変えていっているのだなと思った。

10

同じく多摩川でとってきた水草を一緒に水槽に入れている。（我が家の水槽は多摩川で採ってきたものしか入れていない。石と砂は除く）

これも気になったので図鑑で調べてみた。



11

特徴

- テープ状
- 増えるときは地下茎で増える
- 生命力が強い
- どんどん増える

12

図鑑のページ　　家の水槽の水草

バリスネリア・スピラリス

多分、
これかな

(出典) ザ・水草図鑑 (誠文堂新光社)

最も一般的な水草の一つで、どこの観賞魚ショップでも入手できると書いてあった。

13

バリスネリア・スピラリスをインターネットで調べてみると、
温帯地域に分布するセキショウモの仲間と書いてあった。
（水草図鑑　by東京アクアガーデンより）

- セキショウモは日本の在来種だが、バリスネリア・スピラリスはヨーロッパやアフリカが原産だそうだ。
- とても外見はよく似ているので見分けがつかない。
- バリスネリア・スピラリスならば、お店で買って水槽で育てていたものを、なんらかの理由で川に捨てたのかな、と推測した。

14

まとめ

- 何の魚か解らない稚魚を育てることは、どんな魚になるのか楽しみながらできる。
- 正体のわからない魚を特定するのは難しいこともある。
- 魚よりももっと水草の見分けは難しい。
- 水辺の楽校の牛島先生に聞いて、川の魚について詳しい方に質問して魚の正体を知りたいと思う。

15

様式 12-1

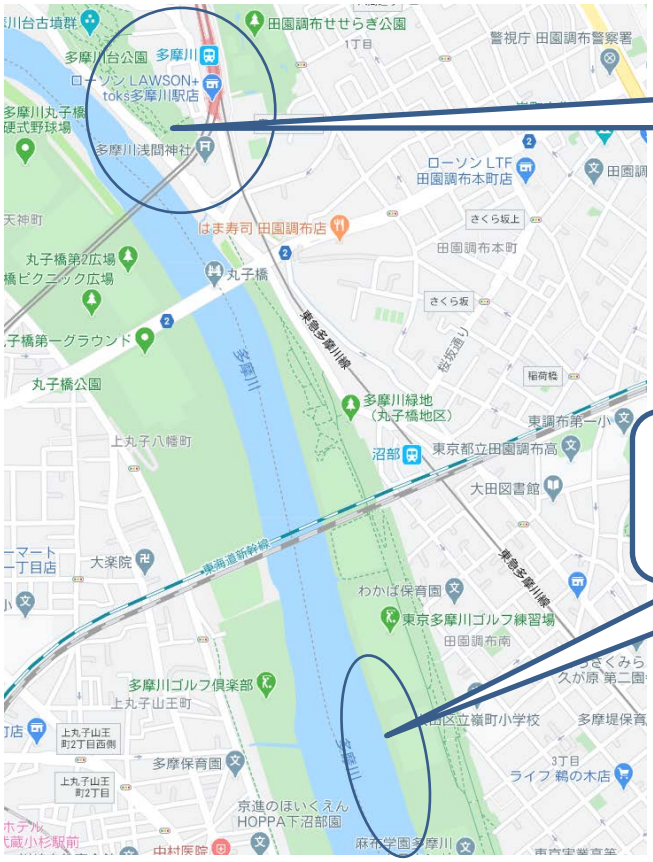
3.川づくり団体部門

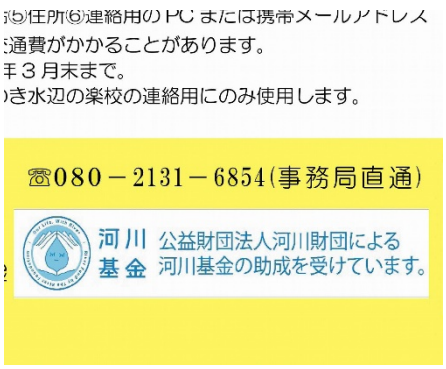
[実施箇所位置図]

助成番号	助成事業名	所属・助成事業者氏名
2022-6113-010	生き物好き集まれ・子供スタッフ育成プログラム	うのき水辺の楽校協議会

	主な実施箇所	多摩川左岸、河口から 12 km

助成事業の主な実施箇所



河川基金ロゴ等表示状況写真

遠景	近景